

様式 7（事前・公表）

令和 7 年度 試験研究課題検討結果票（事前）

課題 No.	課題名	研究 期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討 結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
1	サツマイモの高温リスクに対応した収量及び品質の安定化技術の確立	令和 8 ～ 11 年度	(目的) サツマイモ産地では、ここ数年、高温障害と考えられる空洞症が発生し、深刻な問題となっている。また、食味品質面でも、圃場による食味のばらつきに加えて、高温等の影響による食味品質の低下が懸念されている。一方、主要病害のつる割病では、ベノミル耐性菌の問題も含めて、被害拡大が懸念されている。 そこで、最も緊急を要する空洞症については、発生要因を解明し、それに基づく防止対策技術を確立するとともに、高温リスクを避けるための作期前進化や耐暑性を持つ品種の選定を行う。また、これら試験に関連する食味品質評価や、高温等の食味への影響を明らかにし、貯蔵出荷コントロールや栽培改善に結び付く品質管理技術を確立する。一方、つる割病については、ベノミル耐性菌に有効な薬剤を探索するとともに、育苗中の対策を中心とする防除技術を確立する。 (計画・予想される成果) ○空洞症対策及び食味品質の向上 高温や土壤乾燥の影響を調査し、空洞症の発生要因を解明し、作期前進化や耐暑性品種の利用を含めた中で、耕種的な対策技術を確立し、併せて選別手法の開発を行う。また、高温等の食味への影響を解明するため、肥大ステージ別の高温リスクを評価するとともに、高温条件や草勢条件の異なるサツマイモの内容成分等を分析し、データを蓄積及び解析することで、収穫時のデンプン含量に基づく適正な貯蔵管理技術を確立する。 これらにより、高温等の影響を緩和できるような適切な栽培管理によるベースアップと、選別・貯蔵コントロールによる高品質化を図り、産地ブランド力の堅持に貢献し、産地の維持・発展が図られる。 ○つる割病対策 ベノミル耐性菌に有効な薬剤を探索し、農薬登録に結び付けるとともに、土壤汚染程度の評価法、育苗時の耕種の防除法、対策技術の現地実証を行うことで、効果的なつる割病の対策技術を確立する。 これらにより、ベノミル耐性菌の蔓延防止と圃場への拡大防止を図り、産地の維持・発展に貢献する。	(ア)サツマイモ産地で空洞症がでており、かん水や収穫時の選別による対策を行っているが、栽培技術の対策も必要である。そのためには、空洞症の発生リスクや対策を生育ステージごとに明らかにすることが重要である。 (イ)作付けの前進化の検討は、どのようなイメージがあるのか。 (イ)早期出荷に対応する貯蔵管理はどういうものを検討しているか。 (ウ)つる割病に有効な薬剤はあるが今後のことも考えると新たな薬剤も欲しい。また、高温の影響が立枯病も出てきており、対策を検討いただきたい。	(ア)草勢等の栽培的な視点も含めた中で、空洞症の発生要因を解明する。生育ステージは塊根の肥大程度を指標とし、高温等による空洞症の発生リスクや、かん水方法等の耕種的な対策を組み立てられるよう取り組んでいく。 (イ)早く作付けすることで肥大期の高温リスクが回避ができると考えており、4月上旬植え、8月下旬収穫を想定しているが、早期出荷については、関係機関と相談し検討していきたい。 (イ)早期出荷のためには、早く糖化させる必要があり、貯蔵条件を詳しく検討したい。 (ウ)耐性菌にはトリフミン水和剤が有効ではあるが、浸漬時間が長いとの評価や、耐性菌発生リスクを減らすためにも新しい薬剤の探索を行いたい。 立枯病は高温乾燥の条件で多発しやすい。今回のプロジェクトでは対象病害ではないが、今後の発生状況については注視していく。	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。

5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化した方がよい

4: 課題化した方がよい

3: 部分的に検討する必要がある

2: 大幅に見直しする必要がある

1: 課題化する必要はない

令和 7 年度 試験研究課題検討結果票 (事後)

課題 No.	課題名	研究 期間	研究概要 (目的・計画・成果)	主な所見・指摘事項等	指摘事項等に対する対応	検討 結果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他		
2	農業環境 の変化に 対応したカ メムシ類 の省力防 除技術の 開発	令 和 4 ～ 6 年 度	(目的) 本県で問題化しているカメムシ類の発生生態を解明するとともに、省力的防除技術を確立する。斑点米カメムシ類では、新たに問題化したイネカメムシの発生状況・生態を解明するとともに、早晩性品種が混在する水田地域で適用可能な防除対策技術の確立につなげる。ビワの果樹カメムシ類ではドローンによる高濃度少量散布等の実用性を検証し、現地で導入可能な防除技術としての評価を行う。 (成果の概要) ○イネカメムシ対策の開発 イネカメムシの水田への侵入時期を解明し、それに基づく防除体系を検討した。加害時期による不稔発生割合を確認し、防除適期を明らかにしたほか、有効かつ省力的な薬剤を選定し、その効果を現地圃場で確認することで、イネカメムシ防除体系を確立した。 ○ビワのカメムシ類対策の開発 山間地、傾斜地に圃場の多いビワに効果的な防除方法として、ドローンの活用を検討した。ドローンによる高濃度少量散布による薬液付着状況、効果を確認し、その有効性、残効性を確認した。作業時間が大きく短縮できること、費用対効果も十分であり、ドローン防除がビワのカメムシ対策に有効な手段であることを確認し、防除体系を構築した。	(ウ)エチプロール粒剤が有効であることを示したことは、新たな知見であり、省力化にもつながる特筆すべき成果。今後、他の薬剤も加えて感受性低下の対策や他の斑点米カメムシ類にも合わせた防除体系が必要となるだろう。 (ウ)晩生や飼料用米等、出穂期が遅いものに対する防除はどう行うか。 (ウ)7月上旬中旬のエチプロール粒剤による他のカメムシ類への防除効果はどうか。 (ウ)ビワのカメムシ対策としてドローン防除が有効であることが示されたと考えている。作業的にも短時間で負担が少なくできる。まだ取り組む生産者は少ないが、この結果を示しながら、ドローン防除に取り組む生産者を増やしていきたいと考えている。	(ウ)エチプロールは他県で抵抗性発達の報告があり、出穂期が異なるほ場が入り組んでいる現状での防除体系については今後も検討が必要だと考えている。 (イ)後継課題で、中生、晩生、飼料用米等、出穂期が遅い水稻の防除方法の現地実証に取り組んでいる。 (ウ)他のカメムシ類での防除効果については、現在確認中である。 (ウ)ドローン防除の普及に向けて、散布業者との事前調整も課題となる。果実の大きさを指標とし、果樹カメムシ類の防除適期を推定する手法の確立、さらに残効を考慮した散布体系の構築に向けた試験を後継課題で取り組んでいく。	4

検討評価は以下の番号を記入。

5:計画以上の成果が得られた

4:計画どおりの成果が得られた

3:計画に近い成果が得られた

2:わずかな成果しか得られなかった

1:成果が得られなかった